

目次

1. まえがき	1
2. 結果の分析	
基礎・共通および資格関係	2
音楽学部	5
人文学部	9
人間発達学部	11
グループ平均一覧	17
3. 学生による授業評価アンケートの調査結果及び教員によるコメント	18
4. 資料	178

この表から、講義系科目において1科目につき4つ以上の質問で2点台以下の評価を受けた科目、及び実技系演習科目において1科目につき2つ以上の質問で2点台以下の評価を受けた科目については、学部教務委員会等で抜本的改革も視野に入れその実情や原因の調査が求められる。2点台以下の評価がそれ以下の個数である場合は、各授業担当教員にその旨連絡し、調査・改善を啓発するのが好ましい。

5) その他、1点台の評価を受けた質問がある科目は個別にその内容を調査・吟味する必要がある。

VI. まとめ

今回の授業評価アンケートの結果を受け、授業評価を受けた個々の教員は個別にその対応を検討しリフレクション・ペーパーに報告しているが、最重要課題は「学生の授業外における学修時間の不足」であり、音楽学部は「学生が授業外で十分に学修時間を確保できるように」学部として組織的な対策を講じることが求められている。それが個々の授業を質的に向上させ、学士課程のカリキュラムの質的保証に繋がっていくであろう。

(文責 黒坂 俊昭)

授業評価アンケート結果の分析（人文学部）

【講評】

人文学部の平均評定値のグラフからすれば、問 3 を除いて他の質問項目は全体として 3.20 の数値を上回っており、概ね良好な結果を得ているといえるのであるが、設問について大きく分類してみると、質問の間 4~問 10 は教員に向けられた項目、問 1~問 3、問 11~問 15 は学生に向けられた内容になっている。

アンケートの結果を見てみると、問 8「私語の注意」のみ少し下がるが、教員に向けられたその他の問 4~問 10 は相対的に高い値を示しているのであるが、これに比して学生に向けられた問 1~問 3、問 11~問 15 は低い値を見せている。

特に課題として明瞭になっているのは、問 3 の授業外予習・復習である。他の質問項目に対してその数値は極端に低い。つまり、学生の授業外での勉学の取り組みが貧弱であることが分かるのであるが、一方、この点に限って言えば、個々の科目においては問 3 の数値で高いものもあり、内容的には発表形式の演習科目がこれに該当している。

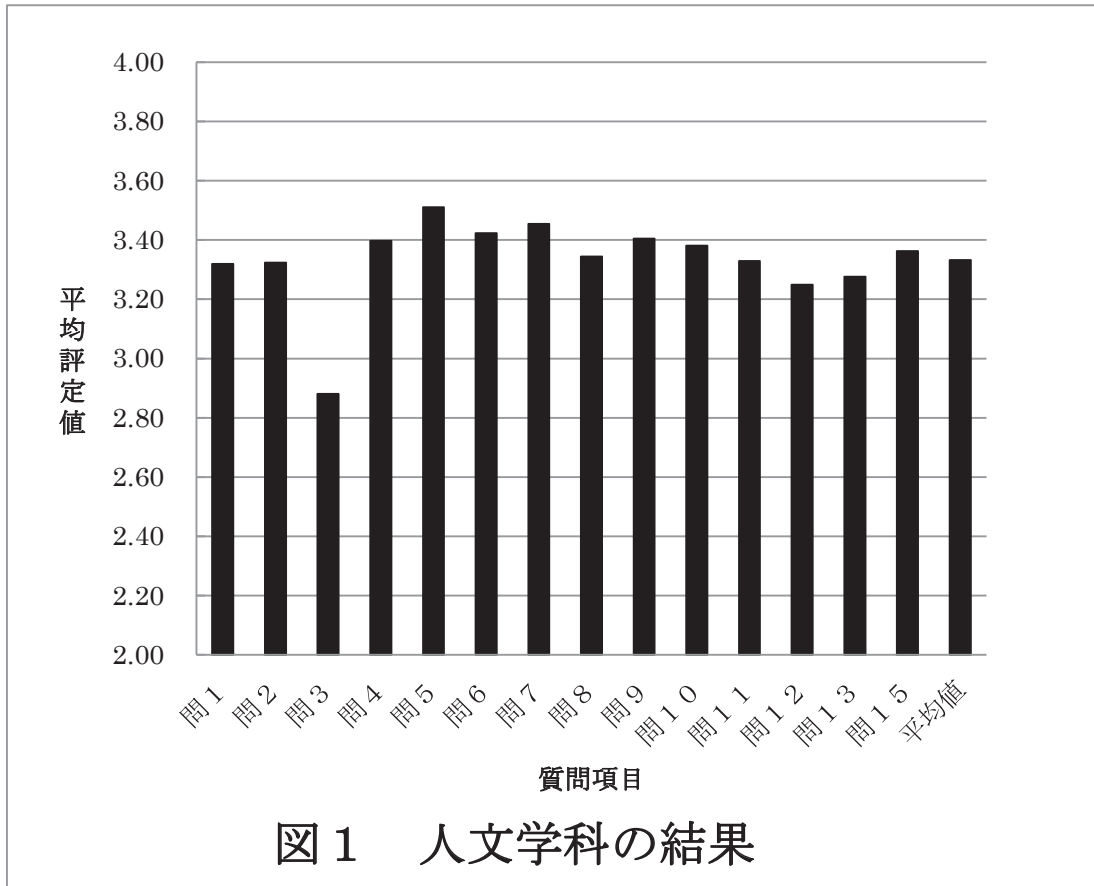
この結果を参考にすれば、今後の一対策としてある程度義務的に授業外での学生の取り組みをそれぞれの科目において課すことも視野にいれることが必要かも知れない。

これに関連してさらにいえば、問 12「受講による問題意識や関心の深まり」と問 13「受講習得の成果」がこの問 3 につづいて低い値となっており、問 3 の結果に見られる学業への消極性に遠因していると推察される。

視点を換えて参考までに、この人文学部の結果をもっとも有効な比較グループとみなし得る留学生の結果と合わせてみると、人文学部全体で示された低いアンケート項目である問 3（3.64）、問 12（3.86）、問 13（3.84）が括弧のとおりの高い値を見せている。

これらのことを全体的に考えてみると、問 3、問 12、問 13 に見られるアンケート結果は、人文学部の重要な課題を浮き彫りにしている。

なお付言すれば、今期の結果は前年度後期の授業評価アンケート結果とほとんど同一のグラフパターンとなっている。



(文責 呉谷 充利)

授業評価アンケート結果の分析（人間発達学部）

1. 評価の特徴

人間発達学部は資格に関連する講義が多く、授業評価アンケートの対象となった講義の多くも資格取得に関連したものであった。そのため、問1「休まずに出席したか」は高い値をしめすが、一方で問2「学習目標の理解」は両学科とも低い傾向を示し、資格取得のために出席しているにもかかわらず、何のために講義を受けているか曖昧なまま受講している学生がいることが推察される。また、資格関連の講義であるにも関わらず問3「予習・復習、時間外学習」の評価点は未だに低い値にとどまっており、本学部の多くの教員が実施している各講義時間の小テストに対しても、予習や復習をしてまで臨むという体制が整っていないことが明らかとなった(表1および図1)。

担当教員の授業に対する姿勢を問う問4～8までの項目は、アンケート対象の講義によりばらつきが大きく、今回も日頃から学生との接点が多い専任教員に比べて非常勤教員で全体的に低い傾向が認められた(図2、図2-2)。また、これらの項目に関する自由記述欄の意見には、学生と日常的な接点が多い専任教員では好意的なものが多く、逆にあまり日常的な接点の少ない非常勤教員には否定的とも思える記述が多々認められた。このことは各教員の講義における態度だけでなく、学生の大学生としての学びに対する認識が不十分であることが伺われる。今後は教員側への対応だけでなく、入学直後のオリエンテーションなどで学生を対象とした高等学校までの学びと大学での学びの違いについて十分に指導する必要性を感じた。

講義の実施状況や理解を問う問9～11までの項目は、全学の平均値と大きな差は認められず、人間発達学部における視覚教材の活用や講義のスピードは、適切であると考えられた(表1および図3)。その反面、「パワーポイント、プリントの字が小さい」、「パワーポイントの進め方が早い」などの意見が自由記述欄に挙げられたことから、視覚教材の活用時には工夫も必要であることが考察された。

講義内容の理解および受講による学修効果を問う問12、13および15の項目においても、全学の平均値に比べて若干高くなる傾向が認められた(表1および図4)。授業評価アンケート対象講義の多くが資格取得に関連することから、問12「受講講座のテーマに関する問題意識や関心の高まり」、問13「新しい知識・考え方・技能の習得」については、評価点をさらに高める努力が必要と考えられる。

2. 自由記述の特徴

自由記述欄では「楽しい」「良かった」という意見が最も多かったが、講義における教員の態度や教室設備に関しても、たくさんの意見が記載されていた。今回

も前回同様に「スライド、パワーポイントの進行が速すぎる」「板書やスライド、プリントの字が小さく見えにくい」など学習意欲に関連する重要な意見も多く、今後も改善が必要と考えられた。これらの意見は教員から気付くことが難しい反面、早急に改善可能な内容である。そのため、これらの意見を把握できる点においても、授業評価アンケートは非常に有効と考えられる。

また、非常勤教員の授業評価アンケートでは、感謝の言葉や講義を通して学んだ内容についても記載されており、注意や評価だけでなく講義や教員に対する学生の思いを伝える手段としても有効であると考えられる。

3. 身についた力の特徴

本授業評価アンケートから問 14 において 6 つの「身についた力」を自己評価する項目が設けられた。人間発達学部における授業は「講義」「実験・実習・演習」などに大別できることから、それぞれについて学生の自己評価を比較した。その結果、座学が主である「講義」に比べて、からだを動かし、班単位で学習する「実験・実習・演習」では調べる力、主体的に取り組む力、プレゼンテーション力およびコミュニケーション力のいずれも高い値を示した。これらのことから、学生の能動的学びのためには、「講義」における更なる工夫が必要であることが示唆された。

表1 人間発達学部および全学平均の推定値

		子ども 発達 学科	発達 栄養 学科	全学 平均
問1	あなたはこの授業に休まず出席しましたか	3.42	3.59	3.48
問2	あなたはこの授業の学習目標を理解できましたか	3.34	3.38	3.43
問3	あなたはこの授業に関して予習・復習を含めて授業時間外も学習しましたか	2.84	2.88	2.89
問4	担当教員の話し方はわかりやすかったですか	3.38	3.27	3.42
問5	担当教員は授業時間を守っていましたか	3.52	3.62	3.67
問6	担当教員はこの授業の学習目標をはっきり示しましたか	3.43	3.43	3.52
問7	担当教員は学生の質問に適切に対応していましたか	3.44	3.41	3.51
問8	担当教員は遅刻者や私語をする学生に対して適切な注意をしていましたか	3.37	3.35	3.43
問9	板書、プリントやパワーポイント、視聴覚教材などが効果的に用いられていましたか	3.48	3.41	3.48
問10	この授業の内容の量やスピードは適切でしたか	3.34	3.31	3.42
問11	この授業の内容は理解しやすかったですか	3.37	3.22	3.35
問12	この授業を受講してテーマとする分野への問題意識や関心が深まりましたか	3.36	3.27	3.37
問13	この授業を受講して新しい知識・考え方・技能などが習得できましたか	3.35	3.30	3.39
問15	この授業を受講して満足できましたか	3.55	3.39	3.43
平均値		3.37	3.34	3.41

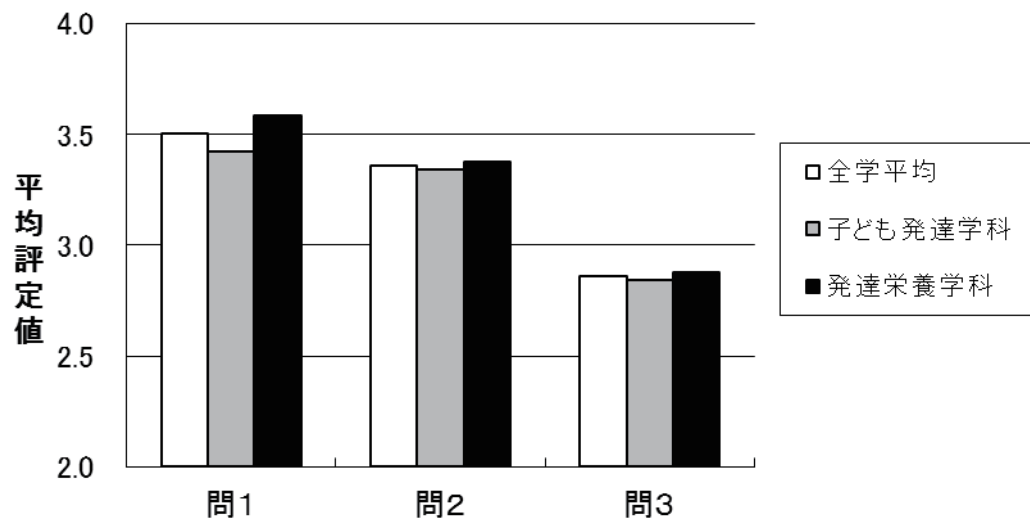


図1 全学および人間発達学部の間1～3の平均評定値

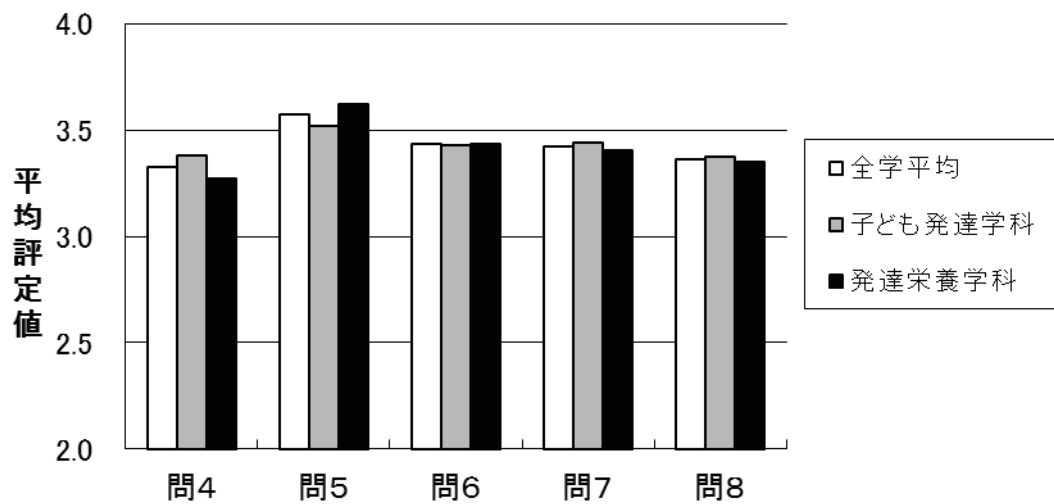


図2 全学および人間発達学部の間4～8の平均評定値

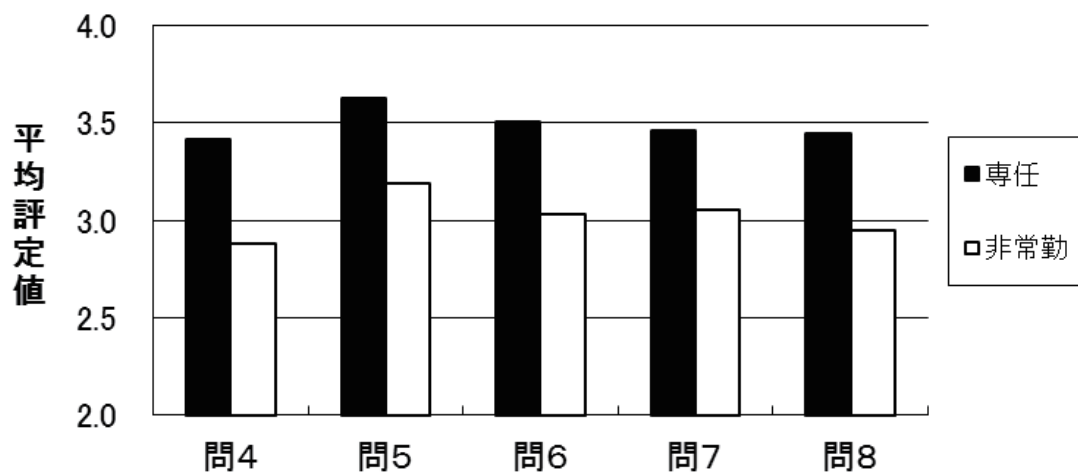


図 2 - 2 人間発達学部専任教員および非常勤教員での問 4 ～ 8 の平均評定値

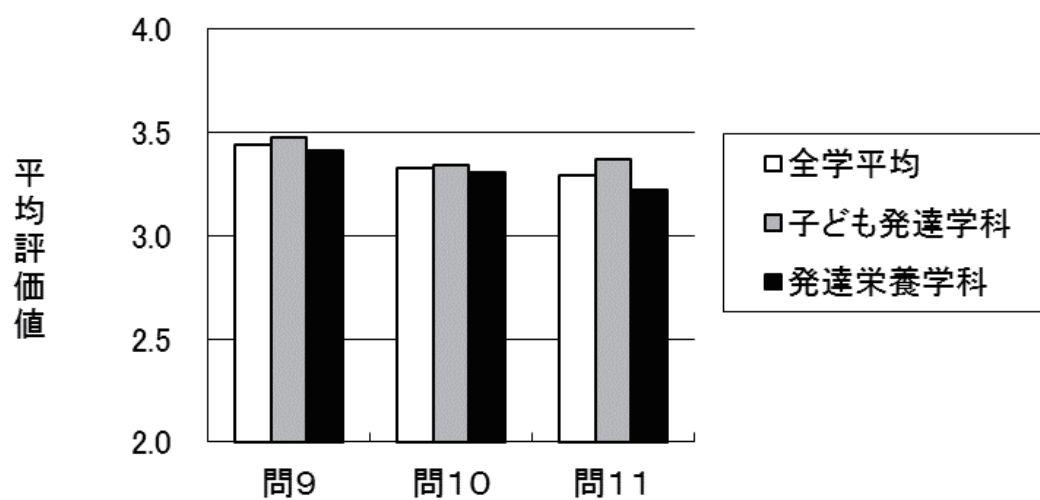


図 3 全学および人間発達学部の問 9 ～ 1 1 の平均評定値

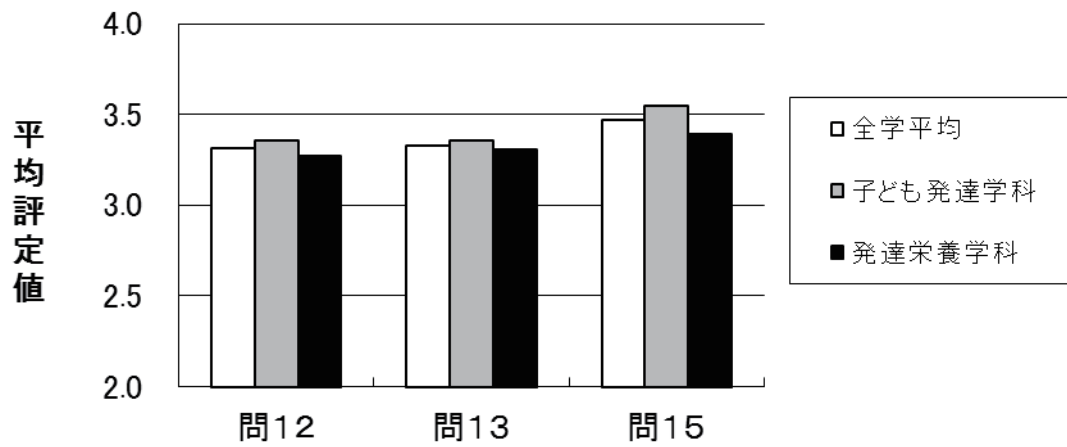


図4 全学および人間発達学部の間12、13および15の平均評定値

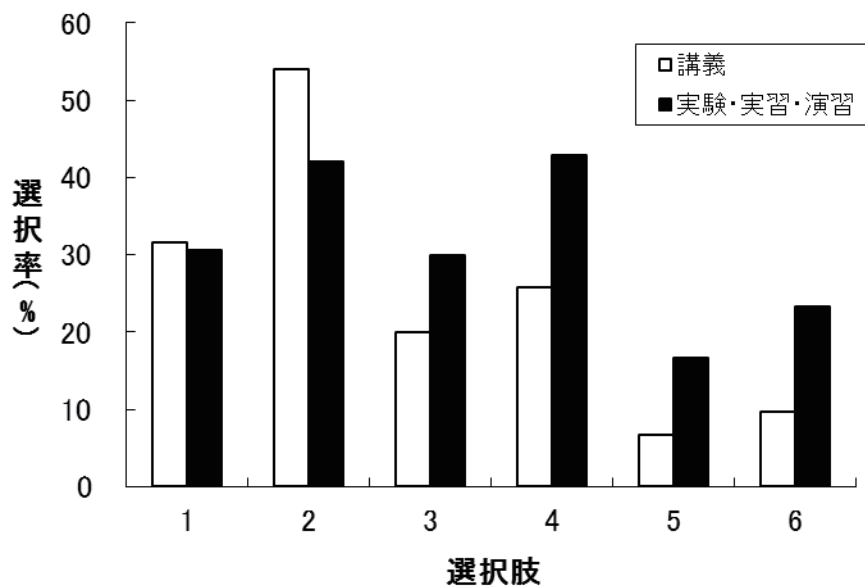


図5 人間発達学部の間14の選択率

※選択肢1：問題・課題を見つける力、2：考える力、3：調べる力
4：主体的に取り組む力、5：プレゼンテーション力、6：コミュニケーション力

(文責 庄條 愛子)

授業評価アンケート調査結果 グループ平均一覧

	基礎・共通	資格	留学生	音楽学科	音楽マネジメント学科	人文学科	子ども発達学科	発達栄養学科
問1	3.40	3.51	3.75	3.46	3.39	3.32	3.42	3.59
問2	3.19	3.44	3.93	3.50	3.35	3.32	3.34	3.38
問3	2.58	2.82	3.64	2.65	2.79	2.88	2.84	2.88
問4	3.19	3.38	3.88	3.49	3.37	3.40	3.38	3.27
問5	3.57	3.67	4.00	3.74	3.71	3.51	3.52	3.62
問6	3.30	3.56	3.95	3.59	3.49	3.42	3.43	3.43
問7	3.32	3.50	3.95	3.51	3.51	3.45	3.44	3.41
問8	3.33	3.48	3.89	3.37	3.31	3.34	3.37	3.35
問9	3.27	3.25	3.80	3.68	3.59	3.40	3.48	3.41
問10	3.24	3.32	3.91	3.52	3.37	3.38	3.34	3.31
問11	3.12	3.22	3.93	3.35	3.23	3.33	3.37	3.22
問12	3.08	3.35	3.86	3.50	3.31	3.25	3.36	3.27
問13	3.14	3.35	3.84	3.50	3.36	3.28	3.35	3.30
問15	3.19	3.35	3.75	3.45	3.40	3.36	3.55	3.39
平均値	3.21	3.37	3.86	3.45	3.37	3.33	3.37	3.34

まえがき

昨年度に引き続き、今年度も、前期と後期の両方でアンケートを実施することになりました。ここに、前期のアンケート結果をご報告いたします。先生方には、アンケート結果に対する意見および改善方法などを記したリフレクション・ペーパーを作成いただき、ありがとうございました。

昨年度は、自由記述欄で授業で得られた知識や技能、授業で満足できた点を述べるよう求め、学生の授業に対する評価をより具体的に探ることを試みました。しかし、以前の自由記述欄と同様、記述が少数にとどまりました。そこで、今年度は、昨年度の質問項目を踏襲するとともに、授業で得られた知識や技能を、6種類の「身についた力」として例示し、その中から選択させる項目を設けました。そして、各項目の選択人数を集計しました。さらに、昨年寄せられたご意見を参考に、出席状況に対する自己評価の高い学生と低い学生別に各質問項目に対する評価を集計しました。これらの結果が、授業に対する学生の評価を具体的に知ったり、授業目標の達成度を確認することなどに役立つことを期待しています。

また、例年通り、FD委員会において学科別などの集計や分析を行いました。合わせて参考にしていただければ幸いです。

なお、12月には後期科目に対するアンケートを実施する予定ですので、その際もよろしくご協力くださいますようお願いいたします。

2015年10月8日
相愛大学FD委員会
江草浩幸
中村圭爾
赤石敏夫
黒坂俊昭
呉谷充利
庄條愛子
藤永慎一
吉田信幸
染川章文
谷川由紀
田尻有紀

授業評価アンケート結果の分析（基礎・共通および資格関係）

1. 評価の特徴

昨年度前期、後期と今年度の各質問項目に対する平均評定値を科目群別に図1と図2に示す。

【基礎・共通科目】 共通科目のカリキュラムが大幅に変更されたが、図1に見られるように、質問3（時間外学習の有無）の評価が極端に低い、質問5～8（時間厳守、学習目標の提示、質問への対応、学生への注意）の評価が比較的高い、といった基本的な傾向は変わっていない。したがって、科目の種類や内容に依存しない、基礎・共通科目の授業形態（多人数の講義科目が多い、など）に特有の傾向という可能性がある。

また、昨年度は、質問2（学習目標の理解）、質問9（授業内容の提示方法の有効性）、質問10（授業の容量やスピードの適切さ）、質問11（理解のしやすさ）、質問12（問題意識や関心の深まり）、質問13（新しい知識などの習得）、質問14（満足度）において、後期の評価が前期を上回った。しかし、今回は、それら全てにおいて昨年度前期をも下回った。これだけのデータから原因を特定するのは困難であるが、時期による学生の授業に対する見方の変化を示している可能性があり、後期のアンケート結果に注目する必要がある。

【資格関係科目】 図2に示される通り、基礎・共通科目と同様の傾向が維持されている。注目すべきは、昨年の報告書で後期に前期より評価が下がったとした質問1（出席状況）、2（学習目標の理解）、3（時間外学習の有無）、6（学習目標の提示）に対する評価が軒並み昨年後期より上がっていることである。逆に、後期に評価の上昇した質問9（授業内容の提示方法の有効性）と質問10（授業の容量やスピードの適切さ）では今年度は評価が下がっている。この点も、先に述べたアンケート時期の影響を示唆している。

2. 「身についた力」の特徴

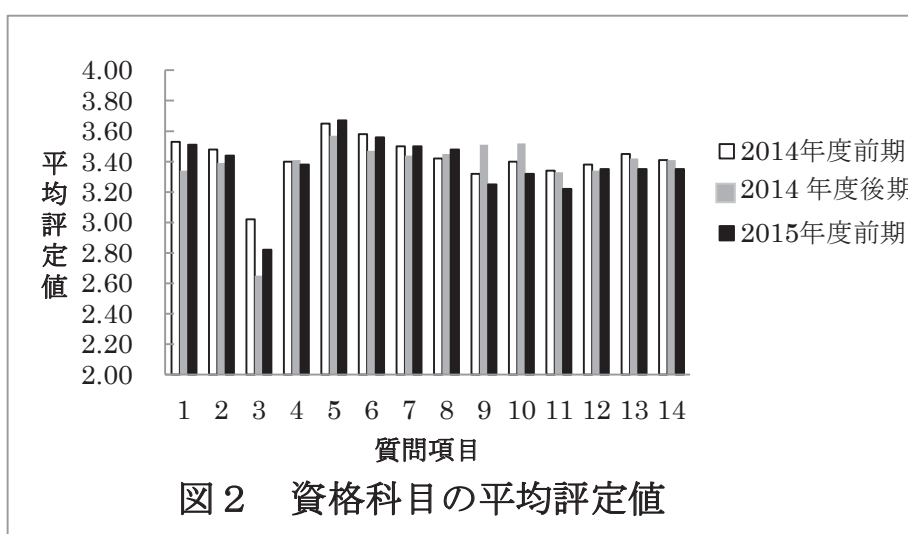
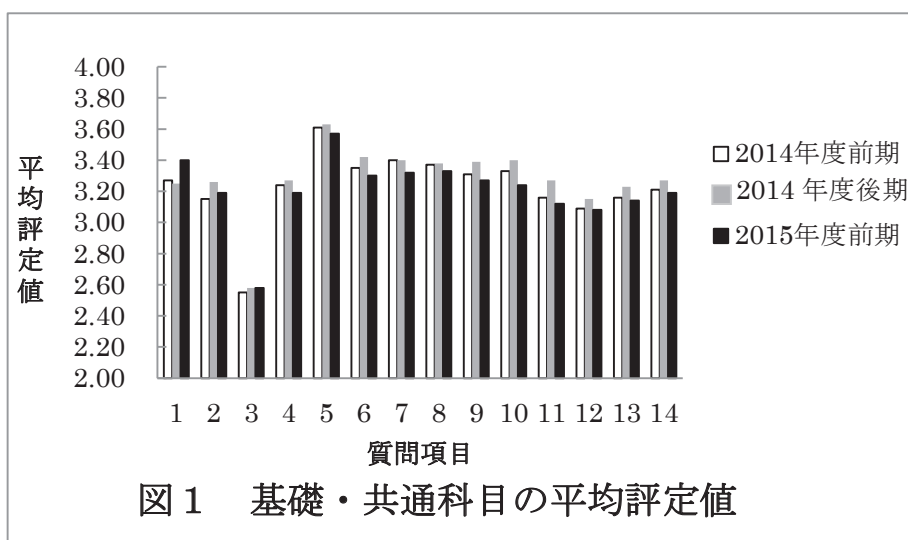
今回初めて導入した「身についた力」を選択させる質問項目について、講義科目、演習・実技科目（外国語、情報処理演習、スポーツ）、資格科目（教職、司書）に分けて、回答傾向を概観してみる。そのために、全選択数に対する各選択肢の選択数の比率を図3に示す。

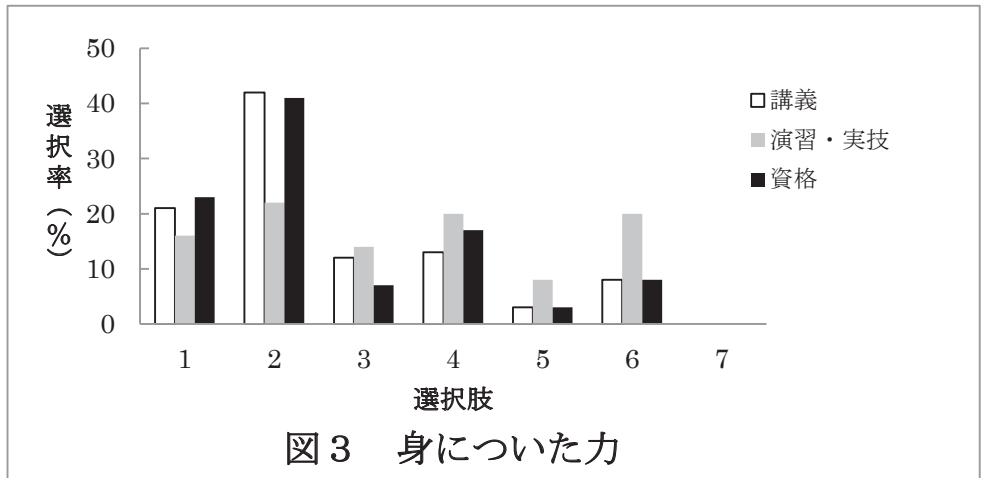
まず、目につくのは、講義科目と資格科目は傾向が似ているが、演習・実技科目は明らかに異なっている点である。たとえば、前者の2科目では選択肢②（考える力）の選択率が突出して高く、後者では、そのような傾向は見られず、選択肢②、④（主体的に取り組む力）、⑥（プレゼンテーション力）がほぼ同程度に選ばれている。また、講義、資格科目では選択肢⑤（プレゼンテーション力）がきわめて低いが、演習

・実技科目ではそれほどでもない。このうち、講義科目と資格科目の傾向が似ている点は資格科目の多くが講義科目であることから、演習・実技科目において「コミュニケーション力」の選択率が高い点は約 2/3 が外国語科目であることから容易に理解できよう。また、近年重要視される「主体的に取り組む力」の選択率が演習・実技科目において相対的に高いことも、いわゆる座学と「実習」を伴う科目との授業形態の差に由来するものと解釈できよう。

3. 自由記述の特徴

昨年度に比べて記述の数が格段に増えた。それ自体は良い傾向であるが、内容の概観は難しくなった。それ故、特にまとめることはせず、担当教員に資料を供するだけにとどめたい。





(文責 江草 浩幸)

授業評価アンケート結果の分析（音楽学部）

I. はじめに

学生による授業評価アンケートは直接学生のためを期して実施されているのではない。例えば、今回のアンケートの問1で「あなたはこの授業に休まず出席しましたか？」という質問は、学生に授業に出席するように促しているのではなく、学生が必ず出席するような授業を展開しているかどうかの確認を教員に促しているのである。問1から問3のように一見学生に自らの授業に対する姿勢を問うているかのような設問も、実は教員の授業に対する意識が問われている。そのために学生による授業評価アンケートは、多くの大学でFD委員会に類する部署が担当し、その目的がアンケート結果から見られる状況を分析するに留まらず、授業改善に役立たせることとされているのである。

II. 授業評価アンケートと授業改善

学生による授業評価アンケートは、最終的に授業改善に帰結しなければならないが、その方法には幾通りか考えられる。例えば、大阪府立大学では「学生の授業評価結果を高等教育センターで分析し、セミナー等で評価の高かった教員の講演を開催する。」といった取組みを実施している。ただこの情報提供はその特定の教員が特定の科目において高い評価を得たという事実に基づいており、必ずしも他の教員・科目に適するとは限らない。以前、授業デザインのための秘訣集として出版された＜成長するティップス先生＞に従って魅力ある授業を演出してみたり、M.サンデル教授の白熱授業を真似て双方向の講義を行なってみたりするブームがあったが、いずれも理想とかけ離れたものであったのは、それを実施する教員や科目が異なったからに他ならない。

III. 低い評価への取組み

それでは本学にあって、学生による授業評価アンケートの結果を授業改善に繋げるにはどのような方策があるであろうか。まずは教員個人が自ら受けた評価を分析し、とりわけ2点台以下の評価に留まっている項目に関して改善策を立てることが喫緊に行なわれなければならない手順である。しかもそれを各教員が個人的に行なうのではなく、ファカルティ・ディベロップメントとして大学の組織的な取組みが必要とされている。尤もアンケート結果の数値が低いからと言ってその内容が不十分であるとは限らない。それを見極めるためにも大学の組織的な取組みが不可欠である。しかしアンケート結果の数値がとりわけ低い場合は早急に根本的な改善が求められる。

加えて、授業改善に向けて、このような個々の結果からのアプローチとは異なった視点、即ち学科全体の集計結果からも、より総体的及び根源的な問題を検討しなければならない。

IV. 評価結果 2 点台以下について

授業評価アンケートの個々の質問（質問 1 から質問 13 及び質問 15）において、評価結果が 2 点台以下となった授業数及びその割合は以下のとおりとなる。

① 講義系科目：音楽学科（7 授業）

質問	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	15
授業数	0	0	6	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
平均値	3.46	3.50	2.65	3.49	3.74	3.59	3.51	3.37	3.68	3.52	3.35	3.50	3.50	3.45
割合%	0	0	85.7	14.3	0	0	0	0	0	0	14.3	0	0	14.3

② 講義系科目：音楽マネジメント（15 授業）

質問	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	15
授業数	1	3	8	4	0	1	2	3	1	3	4	3	2	3
平均値	3.39	3.35	2.79	3.37	3.71	3.49	3.51	3.31	3.59	3.37	3.23	3.31	3.36	3.40
割合%	6.7	20.0	53.3	26.7	0	6.7	13.3	20.0	6.7	20.0	26.7	20.0	13.3	20.0

③ 実技系演習科目：音楽学科（22 授業）

質問	1	2	3	4	5	6	7
授業数	0	6	0	0	8	0	1
平均値	3.59	3.05	3.73	3.67	2.95	3.54	3.55
割合%	0	27.3	0	0	36.4	0	4.5

④ 実技系演習科目：音楽マネジメント学科（1 授業）

質問	1	2	3	4	5	6	7
授業数	0	1	0	0	0	0	0
平均値	3.75	2.71	3.86	3.61	3.00	3.61	3.46
割合%	0	100	0	0	0	0	0

V. 問題点

上記の一覧表から問題点及び検討すべき課題を列挙すると次のようになる。

1) 講義系科目において、①・②共に質問 3 の値が低い。質問 3 は「あなたはこの授業に関して予習・復習を含めて授業時間外も学習しましたか？」という設問であり、受講生の授業以外の学習が不足していることが如実に表われている。平成 24 年 8 月、中央教育審議会より提出された「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」でも取り上げられているように、学士課程教育の質的転換を図るためには学生

の学修時間に着目した改善が必要であり、本アンケート結果から音楽学部においても、とりわけ講義系科目に対する学生の学修時間の確保に向けての対策が急務となっている。またこの質問に対する結果は学科の平均値でも同様であり、その対策は教員或いは授業科目ごとに立てられるだけでなく、学部としての対応が必要とされている。

2) 実技系演習科目においても、③・④共に質問 2 の値が低く、その質問 2 は「あなたは授業（レッスン等）の準備（譜読み・練習等）を十分にしましたか？」という質問で、先に挙げた講義系科目における問題と同様の問題が生じている。この点に関しても学部としての対応が求められている。

3) ③実技系演習科目の中で、質問 5「あなたは授業（レッスン等）で教員に質問や疑問をよく尋ねましたか？」の値が低い。学生が積極的に授業に参加する科目群にあって、コミュニケーション不足が問われる結果に、学部レベルでの検討が必要とされている。

4) 上記の表は授業アンケートの質問ごとに 2 点台以下の科目数を数えたものであるが、次に個々の授業で 2 点台以下の評価を受けた質問数によって整理すると以下のとおりである。

① 講義系科目：音楽学科（14 の質問）

2点台以下の回答数	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	0
該当授業数	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	5	1

② 講義系科目：音楽マネジメント（14 の質問）

2点台以下の回答数	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	0
該当授業数	0	0	1	0	0	0	1	0	1	0	1	1	0	4	6

③ 実技系演習科目：音楽学科（7 の質問）

2点台以下の回答数	7	6	5	4	3	2	1	0
該当授業数	0	0	0	0	0	4	7	11

④ 実技系演習科目：音楽マネジメント学科（7 の質問）

2点台以下の回答数	7	6	5	4	3	2	1	0
該当授業数	0	0	0	0	0	0	1	0